

# 漢文『鴻門の会』定期テスト対策問題 | 書き下し・現代語訳・句法の頻出設問と解答 解答・解説

問1 范増数（しばしば）項王に目し、佩（お）ぶる所の玉玦（ぎょっけつ）を挙げて以て之に示す者（こと）三たびす。

（解説）「数」は「しばしば」と読み、たびたび・何度も、の意。「所佩」は「佩ぶる所」＝身につけている（玉玦）。「示之者三」の「者」はここでは句調を整える置き字的な働きで「示すこと三たび」と読む。

問2（現代語訳）項王は黙ったまま、何も応じなかった。

（心情・態度）范増の再三の合図に気づきながらも、劉邦を討つことに踏み切れず、ためらっている。情に厚く決断を欠く項羽の性格がうかがえる。

問3 項羽は、范増が再三合図を送っても「黙然として応ぜず」、劉邦を討つ好機を前にしながら決断できずにいる。情に厚く非情になりきれない一方で、優柔不断で大局を逃しやすいという、項羽の性格が描かれている。

問4（現代語訳）（我が君である）項王は、お人柄として（むごいことが）できない（＝情け深くて、劉邦を殺すような非情なこととはできない）。

「為人」は「人と為り」と読み、生まれつきの性質・人柄、の意。「不忍」は「忍びず」＝（むごいことを）するに忍びない、思い切つてできない。

問5 (1) 若（なんぢ）入りて前（すす）みて寿を為し、寿畢（をは）らば、請ふ劍を以て舞ひ、因りて沛公を坐に撃ちて、之を殺せ。

(2) 「若」は「なんぢ」と読み、二人称代名詞「おまえ・お前」。ここでは項莊を指す。

(3) 「因」は「よりて」と読み、「それにつけこんで・それを機会に・そのまま続けて」の意。劍舞に乗じて、というニュアンス。

問6 (1) 「請」は「こふ」と読む。

(2) 「請ふ～ん（せよ）」の形で、相手に許可を求めたり、自分が進んで～しようとする意志を表す願望・自請の用法。ここでは項莊自身が「劍舞をいたしましょう」と願い出る形。

問7（表向きの理由）宴席に座興がないので、余興として劍舞を舞ってお見せする、という理由。

（本当の目的）劍舞にかこつけて沛公（劉邦）に近づき、その場で斬り殺すこと。范増の命を受けた暗殺の口実である。

問8 (1) 「不者」は「しからずんば」と読み、「そうでなければ・さもなければ」の意。

(2) ・「且～」＝「まさに～んとす」と読む再読文字で、「いまにも～しようとする」という近接未来を表す。

・「為所～（為～所…）」＝「～（に）…する所と為る」と読む受身の句法で、「～に…される」の意。ここでは「為所虜」＝「虜とする所と為る」＝「捕虜にされる」。

(3)（現代語訳）そうでなければ、おまえたちの仲間は、みな今にも（劉邦に）捕虜にされてしまうだろう。

問9 (1) 「無以」は「もつて～なし」と読む。

(2)（現代語訳）（宴の）座興とするものがない／楽しみとするものがない。「無以為楽」で「楽しみとする手立て

がない」の意。

**問10** (1) 「翼蔽」は「よくへい」と読み、鳥が翼で覆うように、(自分の体で) かばい守ること。

(2) (現代語訳) (項) 荘は(沛公を) 撃つことができなかった。

**問11** 句法の名称は「不能(～あたはず) / 不得(～をえず)」の形の**不可能**を表す句法。「～を得ず」で「～することができない」の意。「荘不得撃」=項荘は撃つことができなかった。

**問12** 「何如」は「いかん」と読み、「どうであるか・どんな様子か」と状態・様子を問う意味。ここでは「今日の(宴の) 事態はどうなっているか」と問うている。

**問13** (現代語訳) その(項荘の) 狙いは、いつも(ずっと) 沛公(を斬ること)にあるのだ。

(「意」の内容) 剣舞は表向きの口実にすぎず、項荘の真の意図=沛公(劉邦)を斬り殺そうとする狙いを指す。

**問14** (1) 臣請ふ入りて、之と命を同じくせん。

(2) 「之」は沛公(劉邦)を指す。

(3) 主君である劉邦の危急に際し、自らの命を投げ出してでも運命を共にしようとする、忠義に厚く勇猛果敢な人物。剣と盾を手に軍門に乱入する豪傑として描かれている。

**問15** (1) 「目」は名詞「め」ではなく動詞として用いられ、「目す(めくばせする・目で合図する)」の意。

(2) 今こそ劉邦(沛公)を討つべきだ、決断して殺せ、という合図を項王に促すため。范増は玉玦の「玦」を「決(決断)」にかけ、早く決断するよう暗示している。

**問16** 「且」は「まさに(～んとす)」と読み、再読文字で「いまにも～しようとする・～しそうだ」という近い未来・予想を表す。

**問17** 項伯は項羽の叔父であり、以前に張良から受けた恩義などから劉邦側に通じていた。項荘の剣舞の真意(劉邦暗殺)を察し、自らも剣舞に加わって体で劉邦をかばい、項荘に斬らせまいとした。

**問18** 秦末、項羽と劉邦はともに秦を滅ぼすために戦ったが、劉邦が先に秦の都・咸陽を攻め落としたことで、項羽はこれを不満とし、両者は対立した。両軍が衝突しかねない緊張の中、劉邦が項羽の陣営である鴻門に出向き、釈明のために会見したのが「鴻門の会」である。(※劉邦は後の漢の高祖。)

**問19** ・范増……項羽の参謀(軍師)。この機を逃さず劉邦を討つべきだと考え、項王に合図を送り、項荘に暗殺を命じる。

・項荘……項羽方の武将。范増の命を受け、剣舞を口実に劉邦を斬ろうとする。

・項伯……項羽の叔父だが劉邦側に通じており、自らも剣舞に加わって体で劉邦をかばい、暗殺を阻む。

**問20** 「鴻門の会」は、表面上は和やかな宴・会見でありながら、その裏で相手の命を狙う陰謀や駆け引きが渦巻く、油断のならない(一触即発の)会合のことを表す。転じて、和やかさを装いつつ互いに殺意・敵意を秘めた危険な席のたとえとして用いられる。

**問21** (1) 司馬遷(しばせん)。

(2) 紀伝体。本紀(帝王の記録)・列伝(個人の伝記)などを中心に構成する歴史叙述の形式で、『史記』がその

範を確立した。

(3) 項羽本紀 (こううほんぎ)。

**問22** (1) ぎょっけつ (2) もくぜん (3) だく (4) よくへい